山形県埋蔵文化財センター調査報告書第232集

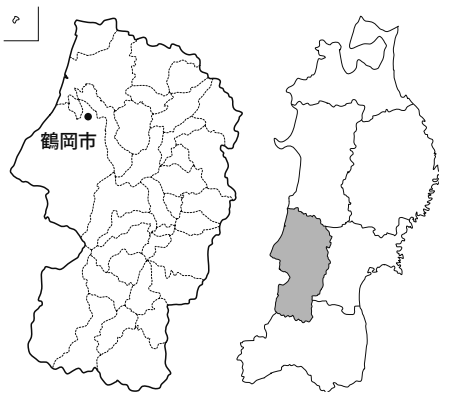
藤島城跡第7次発掘調査報告書

公益財団法人　山形県埋蔵文化財センター

藤島城跡

第７次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 232 集



２０１９

公益財団法人　山形県埋蔵文化財センター

ふじしまじょうあと

藤島城跡

第７次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 232 集

平成 31 年

公益財団法人　山形県埋蔵文化財センター

序

本書は、公益財団法人山形県埋蔵文化財センター（平成 24 年 4 月 1 日に財団法人から移行）が発掘調査を実施した、藤島城跡第 7 次調査の調査成果をまとめたものです。

藤島城跡は山形県鶴岡市藤島にあります。築城年代は不明ですが、南北朝時代には南朝方の出羽国での拠点があったとされる城です。その後、土佐林氏の居城となります。戦国時代に入り大宝寺氏に滅ぼされると大宝寺氏、最上氏、上杉氏と城主が変わりました。

上杉氏に支配された天正 18 年 (1590 年) には、検地に反対する国人一揆の拠点となりました。慶長 5 年 (1600 年) の慶長出羽合戦により再び最上氏の支配下に入り北楯大堰や因幡堰の建設で名を挙げた新関因幡守久正の居城となりますが、元和 8 年 (1622 年) の最上氏の改易により廃城となります。

明治 34 年 (1901 年)、城跡に山形県立庄内農業学校 (現　山形県立庄内農業高等学校) が建設され、庄内地方の農業教育の中心施設として農業分野に留まらず地方自治、スポーツ、芸能など多岐の分野にわたる数多くの優秀な人材を輩出し続けています。

藤島城跡では、これまで校舎の建て替えなどに伴い、度々発掘調査が行われており、今回の調査で 7 回目にあたります。これまでの調査では、土佐林氏の威令が窺われる数々の遺構や遺物が検出、出土しています。今回の山形県立庄内農業高等学校ライスセンター改築事業に伴う調査でも、15 ～ 16 世紀を中心とした陶磁器が出土しています。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先のつくり上げた歴史を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちに課せられた重要な責務と考えます。その意味で本書が文化財保護活動の普及啓発や、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりますが、当遺跡を調査するに際し御支援、御協力いただいた関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

平成 31 年 3 月

公益財団法人　山形県埋蔵文化財センター

理事長　廣瀬　渉

凡　　例

1　本書は、山形県立庄内農業高等学校ライスセンター改築事業に係る「藤島城跡」の発掘調査報告書である。

2　速報会資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。

3　調査は山形県教育庁総務課の委託により、公益財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

4　本書の執筆は、齋藤健、吉田満が担当し、齋藤稔、黒坂雅人、伊藤邦弘、須賀井新人が監修した。

5　遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第Ⅹ系（世界測地系）により、高さは海抜高で表す。方位は座標北を表す。

6　今回の調査で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。遺構の分類記号は、遺構検出時に付けたものを報告書でも踏襲した。そのため、その後の検討の結果、報告書の遺構分類記号と遺構の種類が異なるものもある。

SK…土坑　SD…溝跡　SE…井戸跡　SP…ピット　SX…性格不明遺構
T…トレンチ　RP…登録土器・陶磁器

7　遺構・遺物実測図の縮尺の用法は各図に示した。網点については、以下のとおり。

地山 (遺構断面図)　石 (遺構平面図・断面図)

8　基本層序および遺構覆土の色調記載については、2008 年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」によった。

調 査 要 項

遺跡名	藤島城跡（ふじしまじょうあと）	
遺跡番号	423-034	
所在地	山形県鶴岡市藤島字古楯跡 221	
調査委託者	山形県教育庁総務課	
調査受託者	公益財団法人山形県埋蔵文化財センター	
受託期間	平成 30 年 4 月 1 日～平成 31 年 3 月 31 日	
現地調査	平成 30 年 5 月 28 日～ 7 月 6 日	
調査担当者	業務課長	伊藤邦弘
	調整主幹 (兼) 課長補佐	須賀井新人
	専門調査研究員	齋藤健（調査主任）
	調査員	吉田満
調査指導	山形県教育庁文化財・生涯学習課	
調査協力	山形県立庄内農業高等学校	
	鶴岡市教育委員会	
	山形県庄内教育事務所	
	山形県庄内総合支庁建設部建設課	
	公益財団法人藤島文化スポーツ事業団	
	社会福祉法人鶴岡市社会福祉協議会藤島福祉センター	
業務委託	基準点測量業務　株式会社鈴木久測量設計事務所	
	空中写真測量業務　株式会社ワクニ	
発掘作業員	伊藤雅子　佐藤正規　武田桂三　兵田悦　安田茂（五十音順）	
整理作業員	太田清治郎　志鎌久悦　土屋真一（五十音順）	

目　　次

Ⅰ　調査の経緯
　　1　調査に至る経緯‥ 1
　　2　調査の方法‥‥‥ 2

Ⅱ　立地と環境
　　1　地理的環境‥‥‥ 3
　　2　歴史的環境‥‥‥ 3

Ⅲ　調査の成果
　　1　調査の概要‥‥‥ 8
　　2　遺構と遺物‥‥‥ 8

Ⅳ　調査のまとめ‥‥‥‥‥　22

報告書抄録‥‥‥‥‥‥‥‥巻末

表

表 1　遺跡一覧表 …… 7
表 2　遺物観察表 (1) …… 20
表 3　遺物観察表 (2) …… 21

図　版

第 1 図　『筆濃餘理』添付図 …… 1
第 2 図　調査概要図 …… 2
第 3 図　調査区周辺字限図 …… 4
第 4 図　遺跡位置図 …… 6
第 5 図　遺構配置図 …… 12
第 6 図　基本層序（北壁）、SP38、SK29、SE71、SP30・31 …… 13
第 7 図　SX66 …… 14
第 8 図　SK46・SK63・SP40、SP68・SK53、SP25、SK51・SP13 …… 15
第 9 図　SK84・SK83、SK54、SK50、SK23 …… 16
第 10 図　出土遺物 (1) …… 17
第 11 図　出土遺物 (2) …… 18
第 12 図　出土遺物 (3) …… 19

写真図版

写真図版 1　調査区全景
写真図版 2　調査区遠景
写真図版 3　調査区全景（調査前）、調査区北壁基本土層、調査区東壁基本土層
写真図版 4　SE71 土層断面・完掘状況、SP38 土層断面、SK29 土層断面、SP30・31 土層断面、SK46 土層断面、SK46・SK63 土層断面、SK46 完掘状況
写真図版 5　SX66 土層断面・完掘状況
写真図版 6　SK51 土層断面・完掘状況、SK84・SK83 土層断面、SK84 完掘状況、SK54 土層断面、SK50 土層断面・完掘状況、SK23 土層断面
写真図版 7　SE71、SD20、SK23・50・54・84、SP5 出土遺物
写真図版 8　SP7・57、SX19・66 出土遺物
写真図版 9　SX66、遺構外出土遺物

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経緯

藤島城跡は鶴岡市藤島字古楯跡に所在する中世の城館である。長年、羽黒山別当職を務める土佐林氏の居城であったが、戦国時代末期になると大宝寺氏、最上氏、上杉氏、再び最上氏と目まぐるしく主が変わり、因幡堰の開削事業で知られる最上氏家臣新関因幡守久正が最後の城主で、元和 8 年 (1622 年) に最上家が改易されるとともに廃城となっている。以降、本丸跡に八幡神社が建てられ、他の城地は耕地として使用されていたことが、庄内藩士安倍親任（ちかとう）により幕末に編纂執筆された『筆濃餘理（ふでのあまり）』の模式図により窺われる。(第 1 図)

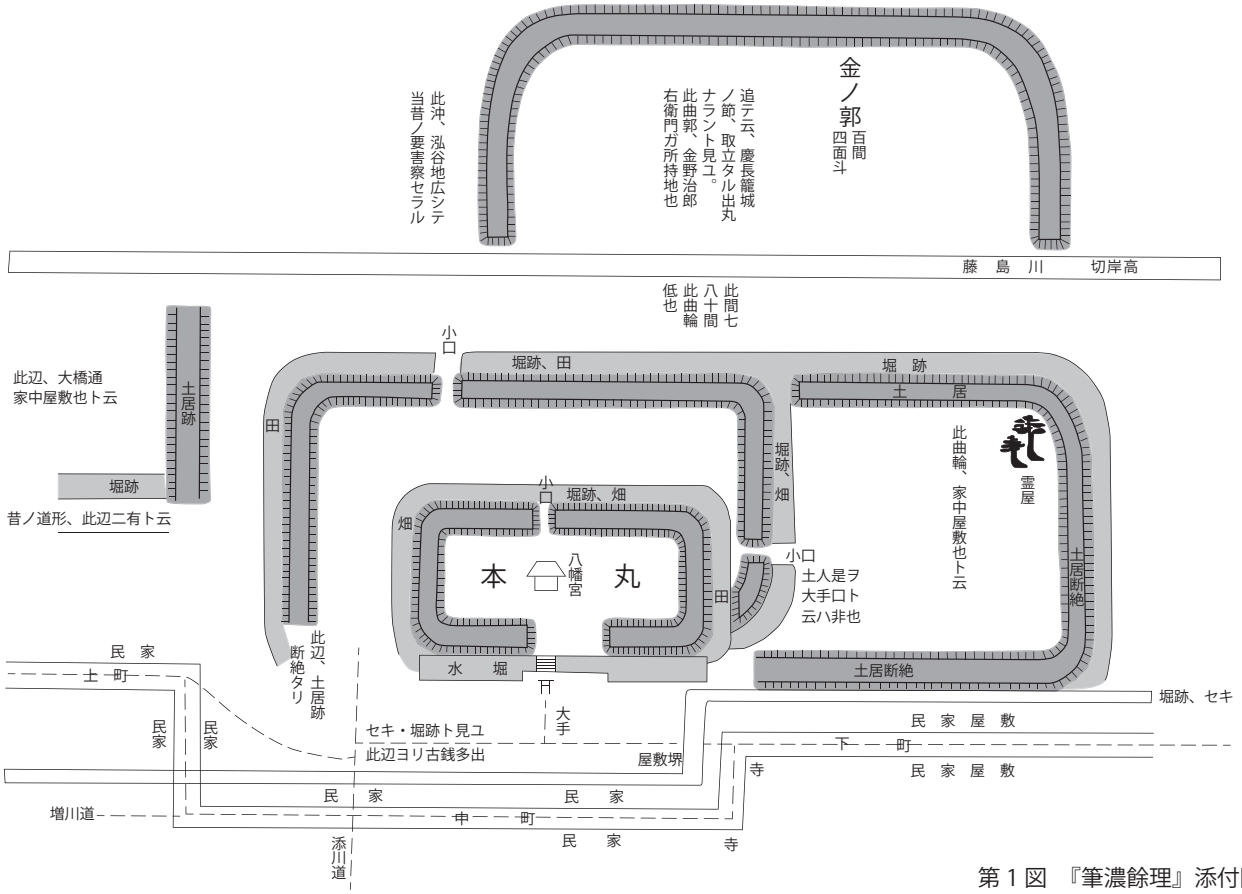
明治 34 年 (1901 年)9 月 12 日には、新設されたばかりの山形県立庄内農業学校 (現 : 山形県立庄内農業高等学校) が移転してきて、それ以降は数度にわたる改築や敷地の拡大を経ながら、ほぼ全ての遺跡範囲は学校敷地として一貫して利用されてきた。

本遺跡では、昭和 54 年の藤島川河川改修事業に伴って初めて発掘調査が行われて以降、山形県立庄内農業高等学校施設の改築や新築等により、平成元年に 2 度、平成 3 年、平成 4 年、平成 5 年と発掘調査が実施され、今回で 7 度目の発掘調査になる。(第 2 図)

今回の調査原因は、山形県立庄内農業高等学校ライスセンター改築事業 (以後、事業) である。

当校のライスセンターは、藤島川左岸の校地に所在するが、老朽化が激しく耐震基準も満たしていないために調査区に移転改築することになった。

調査に先立ち、平成 29 年に、山形県教育委員会（以後、県教委）によって試掘調査が行われ、中世の陶磁器の出土を得た。これを受け、県教委との間で協議が進められ、



第 1 図　『筆濃餘理』添付図

記録保存を目的とした調査を行うこととなり、公益財団法人山形県埋蔵文化財センター（以後、埋蔵文化財センター）が調査の委託を受けた。

2　調 査 の 方 法

A　発掘調査

調査は工事用図面に基づき、事業範囲 237.6 ㎡を対象に実施した。

調査は、調査区を設定することから始めた。

調査事務所を設置した後、5 月 28 日に機材を搬入し、調査区外縁に設定したトレンチを手掘りで掘り下げ、遺構検出面を確認した後に 5 月 30 日から重機で表土の掘削を行った。その後、外部委託して基準点杭と方眼杭を設置し、面整理作業を経て、遺構の検出作業を行った。6 月 6 日に検出状況の全体写真撮影を行い、遺構の精査作業に着手した。さらに、必要に応じ土層断面図の作成、記録写真撮影も行った。7 月 3 日に、空中写真測量を実施した。7 月 5 日には事業者に調査成果の説明を行って調査区の引き渡しについて打ち合わせを行った。7 月 6 日には機材の撤収を行い、次の週には調査事務所などの施設の撤去も完了した。

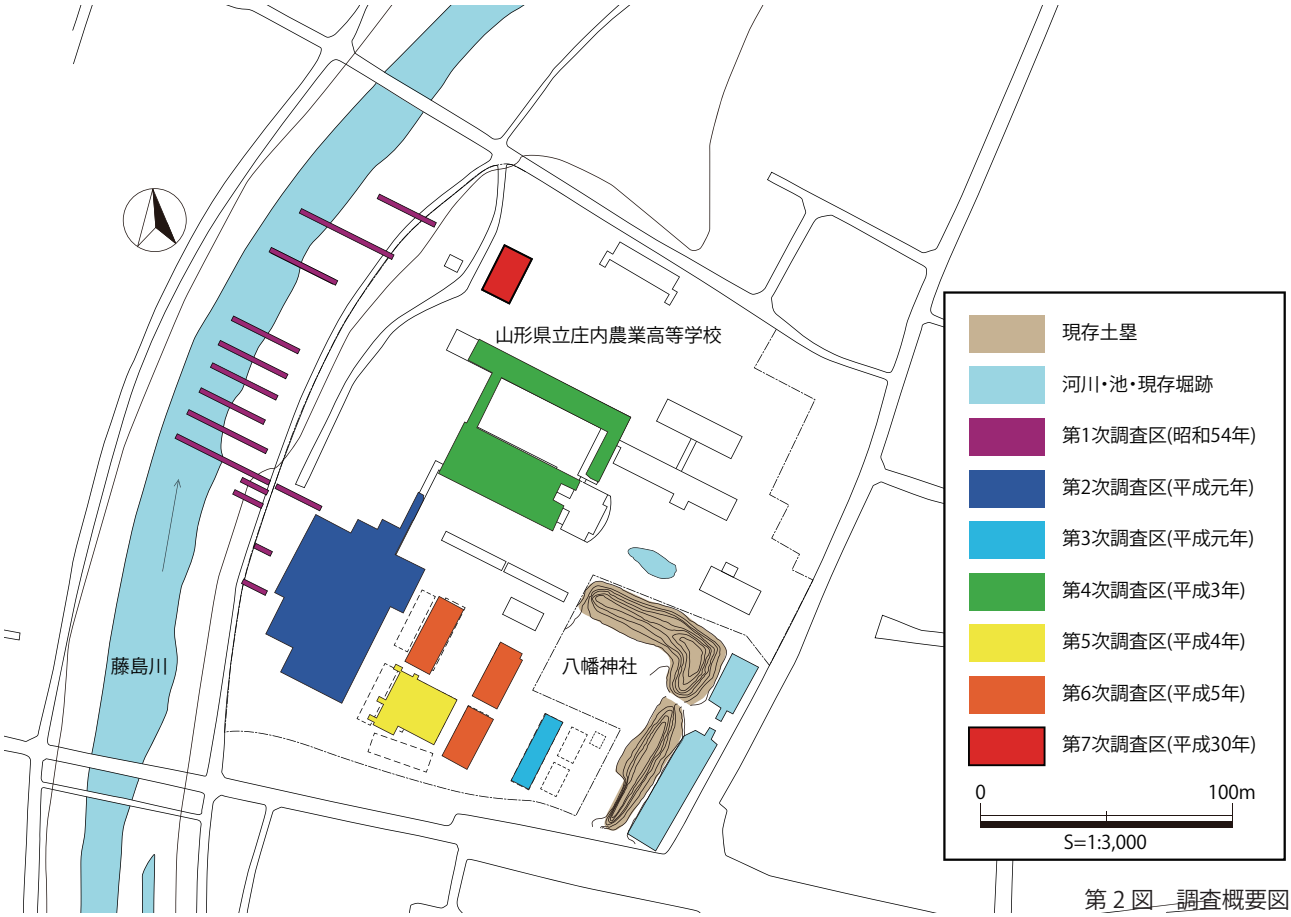
B　整理作業

調査終了後、出土遺物や記録類は埋蔵文化財センターに運び、整理作業員を雇用して整理作業を実施した。

まず、出土遺物の洗浄・注記作業を行った。注記は、遺跡名「フジシマ」の後に必要に応じて出土遺構名や層序を記入した。

そして、遺物の接合作業を実施し、完了したところで遺物実測作業に入った。その後、実測図のデジタルトレースや、遺物の写真撮影を行った。編集・原稿執筆作業を行い平成 30 年度内に報告書を刊行した。

陶磁器類の実測は、外形線と断面のみ作製し、磁器の外面の文様や釉調は、はめ込み写真により表現した。縮尺は概ね 1/3 を原則で掲載したが、瓦は 1/5 で、古銭については 1/1 で掲載した。



第 2 図　調査概要図

Ⅱ　立地と環境

1　地理的環境

藤島城跡は、山形県鶴岡市藤島字古楯跡に所在する。JR 羽越本線の藤島駅の東約 500 mに位置し、地目は学校用地が大部分を占め、他は宅地として利用されている。藤島川東側の自然堤防上に位置し、標高は約 11 ～ 12 mを測る。

現在の鶴岡市は従来の鶴岡市、羽黒町、櫛引町、朝日村、温海町、そして当城跡が位置する藤島町が合併し、平成 17 年 10 月 1 日に発足し、山形県内最大の面積を有する自治体となった。

鶴岡市は山形県の北西部、庄内地方の南部に位置し、西に日本海を臨み、東は出羽丘陵により内陸地方と隔てられ、南は新潟県と境を接している。

庄内地方は、最上川水系や赤川水系の諸河川によって扇状地が形成され、東西 15km、南北 50km にわたる肥沃な庄内平野が広がり、日本有数の穀倉地帯としても有名である。

鶴岡市南東部には出羽三山の月山・羽黒山・湯殿山を臨み、その月山を源流とする藤島川は藤島地域の中央を蛇行しながら北流して京田川に合流、さらに河口付近で最上川と合流して日本海に注ぐ。

鶴岡市藤島地域は、穀倉地帯庄内平野のほぼ中央に位置し、古くから稲作を基幹産業として発展してきた。河間低地、後背湿地及び扇状地を地形とした平野が広がり、農業に適した環境にあり、地域面積の 6 割以上が農地として利用されている。藤島川流域には約 3,900ha の肥沃な耕地が広がり、山形県水稲奨励品種で全国的に人気上昇中の「つや姫」の誕生の地としても有名である。

2　歴史的環境

藤島城跡は、鶴岡市藤島地域を北流する藤島川の自然堤防上に位置する中世の城館跡である。周辺にも多くの遺跡が確認されている。

藤島城跡は、これまで山形県教育委員会・埋蔵文化財センターによる発掘調査が 6 次にわたり実施されている。昭和 54 年の藤島川河川改修事業に伴う発掘調査（第 1 次）に始まり、それ以降（第 2 ～ 6 次：平成元年～ 5 年）は、現在の県立庄内農業高等学校の施設建設に伴う発掘調査が行われている。第 1 次調査では、藤島城跡の外郭西側に相当する藤島川の河川敷が対象となり、トレンチ調査が行われ、当該地域からは外郭を構成する土塁の存在が確認されている。第 2 ～ 6 次調査では、校舎・体育館、温室等の学校施設建設に伴う調査が行われ、断片的ではあるが広く内郭・外郭の様相が明らかとなった。本丸に伴う堀跡や建物跡、井戸跡、土坑、柱穴等の遺構などが検出され、概ね 15 ～ 16 世紀頃の陶磁器等の豊富な遺物が出土している。

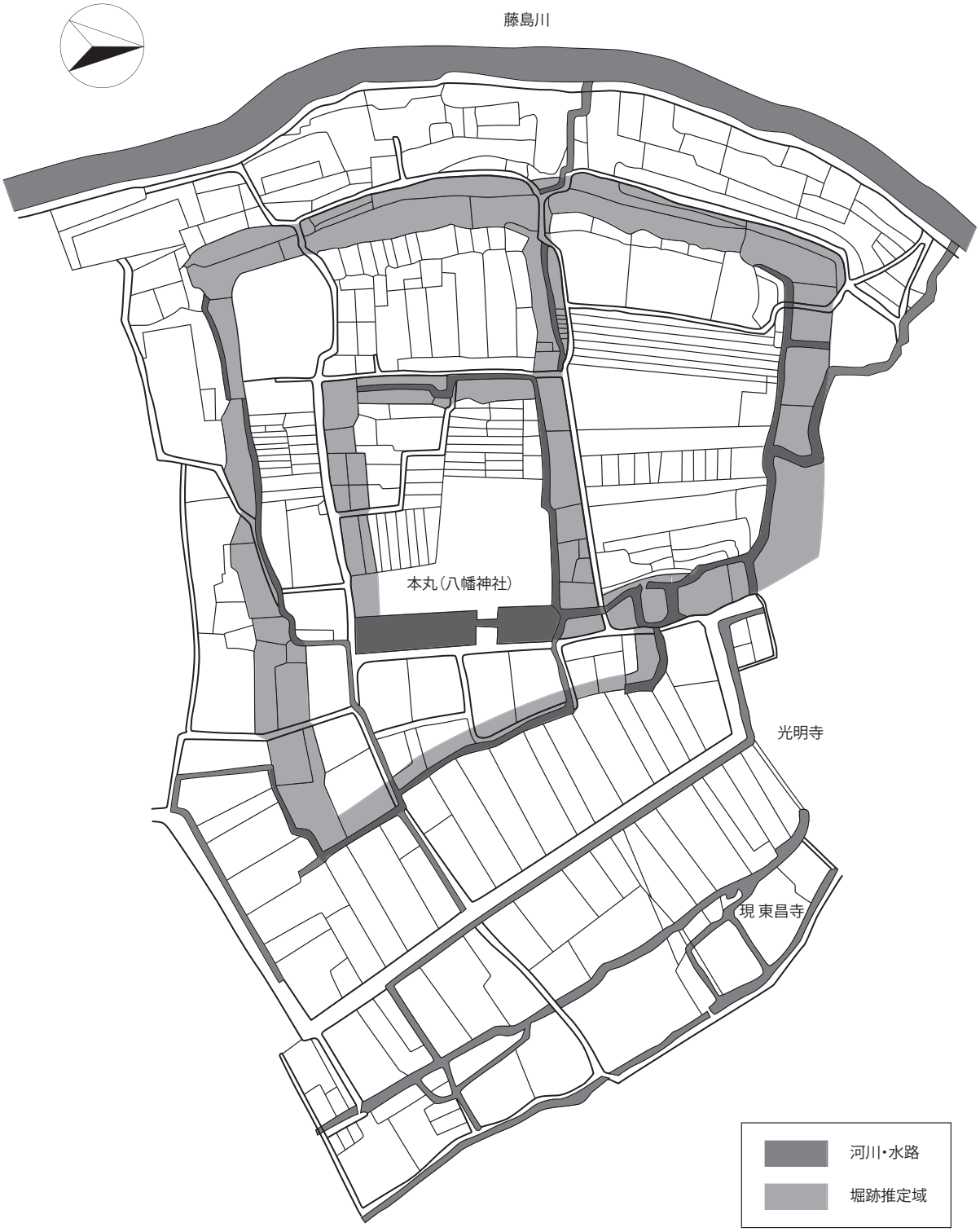
A　鶴岡市の遺跡

鶴岡市内の埋蔵文化財包蔵地は 570 ヶ所を数える。その内、藤島地域には 64 ヶ所が確認されているが、約半数は奈良・平安時代の遺跡で、旧石器時代・弥生時代・古墳時代の遺跡は極僅かである。藤島地域及び周辺の遺跡を時代毎に紹介する。

旧石器時代の遺跡では、越中山遺跡群が有名である。東北地方旧石器研究の先駆けとなる遺跡である。後期旧石器時代に属し、ナイフ形石器、石刃等の石器や、住居と思われる遺構などが発見されている。

縄文時代の遺跡では、草創期から晩期まで数多くの遺跡が点在する。鶴岡市東部地域において、中川代遺跡や玉川遺跡群が有名である。中川代遺跡からは中期頃の土器とともに「刻文付有孔石斧」が出土している。これは、中国の大汶口文化や良渚文化のものと考えられ、その時代に大陸から渡来してきたものと思われる。玉川遺跡群は、中期から晩期にかけての土器・石製品が多量に出土している。現在は、玉川寺の敷地として利用されている。

弥生時代の遺跡では、鷺畑新田遺跡、郷の浜 E 遺跡、高寺 A 遺跡等が挙げられるが、僅かに土器や石器が出土する程度である。庄内地域の全域においても当該期の遺跡は少なく、弥生時代前期頃の砂沢式土器と共に遠賀川系土器・在地土器が出土する生石 2 遺跡 (酒田市) は



山形県埋蔵文化財調査報告書第193集　藤島城跡第5次発掘調査報告書掲載図を加筆修正

第 3 図　調査区周辺字限図

山形県内の弥生時代の遺跡では有益な成果を得ている。

古墳時代では、旧藤島町域の添川地区の鷺畑山古墳、添川古墳等がある。鷺畑山古墳は１号墳 (円墳)、２号墳 (方墳)、３号墳 (方墳) の３基確認されており、１・２号墳の学術調査が実施されている。1 号墳については、地元の有識者を主体とする発掘調査が３次に亘り実施され、墳丘の構築方法が確認されている。２号墳については、東北芸術工科大学考古学研究室による調査が実施され、古墳時代前期まで遡ることが明らかとなった。また、同じ旧藤島町三和地区内からも古墳時代前期頃の土師器資料が出土している。

奈良・平安時代では、平形館跡、上蛸井遺跡、石欠遺跡、西山遺跡等多数の遺跡が存在する。平形館跡の周辺には「古郡」の地名が現在にも残り、郡衙関連の施設の存在が窺われているが、詳細は定かではない。

中世では、当城跡の周辺に平形館跡・向館跡・方眼寺館跡等の城館跡が集中している。また、旧藤島町教育委員会により発掘調査が行われた勝楽寺遺跡・中山廃寺跡・上蛸井遺跡等の寺院跡や集落跡も存在する。

B　藤島城の沿革

藤島城の築城は 14 世紀の南北朝時代にさかのぼると言われるが、その時期の遺物はこれまでの調査で出土しておらず、不明である。

14 世紀中頃から土佐林氏の居城となり、15 世紀中頃に土佐林氏は羽黒山別当職に就任し栄えた。以降、尾浦城主大宝寺 (武藤) 氏との対立と服従を繰り返した。

天文年間、藤島城主土佐林禅棟は大宝寺氏の重臣として大宝寺氏の庄内制圧を支えた。しかし、大宝寺義氏との対立が先鋭化し、元亀 2 年 (1571 年) に土佐林禅棟は義氏に攻め滅ぼされ、藤島城は義氏は弟の義興に与えられた。

天正 11 年 (1583 年)、大宝寺義氏が家臣の謀反で横死すると、義興が家督をついで尾浦城に移り、藤島城は家臣の小國彦次郎が城代として預かることとなった。

天正 15 年 (1587 年)、最上義光が庄内に侵攻し、大宝寺義興が自刃すると、藤島城も最上氏の支配下に置かれたが、翌年に義興の養子大宝寺義勝が、実父の本庄繁長と共に越後から侵攻し、庄内から最上氏を駆逐した。

大宝寺義興は、豊臣秀吉から庄内領有を公認され、藤島城に栗田刑部を配するとともに、領内でいわゆる太閤検地を実施した。

天正 18 年 (1590 年)、平形館主の平賀善可を中心に一揆を起こして大宝寺城を攻め落とし、藤島城は地侍金右馬允が占拠した。秀吉の命を受けて上杉景勝家臣の直江兼続が討伐に乗り出し、大宝寺城を奪還したが、藤島城を落とすことはできず、一揆勢と和睦をして越後に撤兵した。翌年、直江兼続は再度藤島城を攻め、激戦の末に落城させた。この一揆により、本庄繁長・大宝寺義勝父子は改易されて庄内は上杉領となり、藤島城には木戸玄斎が配された。

慶長 5 年 (1600 年) の関ヶ原の戦いにともなう慶長出羽合戦により、最上義光が庄内を制圧し、領有を認められた。藤島城には新関因幡守久正が 7000 石で入った。

しかし、元和 8 年 (1622 年) に最上氏が御家騒動で改易され新関久正は古河城主土井利勝に預けられ、藤島城は廃城となった。寛永元年 (1624 年) に新関久正は古河で没したが、遺言により藤島の法眼寺に葬られた。

新関久正は、因幡堰や北楯大堰の計画や施工に深く関わり、高く評価されている。

江戸時代、廃城された藤島城跡は、本丸に八幡神社が祀られ、他の城域は農地となっていた。また、藤島城北側には、庄内藩主が参勤交代時に立ち寄る休憩所としての屋敷も建てられていた。幕末の庄内藩士安倍親任は、庄内の歴史や地理をまとめた『筆濃餘理』を記している。その中に藤島城に関する記述もあり、当時の縄張り図も添付されている。(第 1 図)

明治 34 年 (1901 年)9 月 12 日には、新設されたばかりの山形県立庄内農業学校 (現 : 山形県立庄内農業高等学校) が当地に移転し、現在に至っている。

大正 14 年 (1925 年) 刊行の山形県による史蹟名勝天然記念物調査報告によると、「今本丸の土壘及水濠の一部を残すに過ぎず、外郭は土壘は崩されたるも水濠の跡田となりて存し、その形状を想見するに足る。」と記されており、添付図面にからは現在校地になっている部分にも水田があったことが窺われる。また、本丸の西外の第 5 次、第 6 次調査区周辺には「焼米」と記されており、そのあたりから炭化米が出土したとみられる。

国土地理院発行５万分の１地形図「鶴岡」使用　　第４図　遺跡位置図

表１　遺跡一覧表

No.	遺跡番号	市町村	遺跡名	種別	時代
1	423-034	鶴岡市	藤島城跡	城館跡	中世
2	426-002	三川町	横川Ｂ遺跡	住居跡	平安時代、中世
3	426-007	三川町	横川Ｂ＇遺跡	遺物包蔵地	平安時代、中世
4	426-016	三川町	二口遺跡	遺物包蔵地	平安時代
5	426-014	三川町	青山館跡	城館跡	中世
6	203-121	鶴岡市	中京田遺跡	遺物包蔵地	平安時代、中世
7	426-008	三川町	横山城跡	城館跡	中世
8	426-015	三川町	三田遺跡	遺物包蔵地	平安時代 (前期)、中世
9	426-009	三川町	横川Ａ遺跡	遺物包蔵地	平安時代
10	426-005	三川町	家岸遺跡	遺物包蔵地	平安時代
11	426-006	三川町	横川Ｃ遺跡	遺物包蔵地	平安時代
12	423-018	鶴岡市	平形Ｃ遺跡	遺物包蔵地	平安時代
13	423-035	鶴岡市	平形Ｂ遺跡	遺物包蔵地	平安時代
14	423-013	鶴岡市	平形Ｄ遺跡	遺物包蔵地	平安時代
15	423-017	鶴岡市	平形Ｆ遺跡	集落跡	平安時代、中世
16	423-007	鶴岡市	平形館跡	城館跡	平安時代、中世
17	423-041	鶴岡市	平形Ｅ遺跡		
18	423-040	鶴岡市	平形Ａ遺跡	遺物包蔵地	平安時代
19	423-062	鶴岡市	藤島Ｃ遺跡	遺物包蔵地	平安時代
20	423-053	鶴岡市	受信寺跡	寺院跡	中世
21	423-036	鶴岡市	藤島Ｂ遺跡	遺物包蔵地	平安時代
22	423-051	鶴岡市	藤島Ｄ遺跡	遺物包蔵地	平安時代
23	423-005	鶴岡市	向館跡	城館跡	中世
24	423-037	鶴岡市	平形Ｈ遺跡		
25	423-027	鶴岡市	法眼寺館跡	城館跡	中世
26	423-006	鶴岡市	六所Ｂ墳墓	墳墓	平安時代
27	423-029	鶴岡市	村東遺跡	集落跡	平安時代
28	423-023	鶴岡市	古郡Ｂ遺跡	墳墓	平安時代、中世
29	423-002	鶴岡市	古郡Ａ遺跡	遺物包蔵地	平安時代
30	423-050	鶴岡市	渡前遺跡	遺物包蔵地	平安時代
31	423-033	鶴岡市	渡前Ｂ遺跡	遺物包蔵地	平安時代
32	423-032	鶴岡市	古郡Ｃ遺跡	郡衙跡	奈良時代
33	423-001	鶴岡市	古郡館跡	城館跡	中世
34	423-003	鶴岡市	宮目寺跡	寺院跡	中世
35	423-014	鶴岡市	福重院寺跡	寺院跡	近世
36	426-001	三川町	新山塚	墳墓	平安時代、中世
37	426-013	三川町	獅子塚	墳墓	平安時代、中世
38	426-012	三川町	助川Ｂ遺跡	遺物包蔵地	平安時代
39	426-003	三川町	稲荷館跡	館跡	平安時代、中世
40	426-010	三川町	西谷地遺跡	遺物包蔵地	奈良・平安時代
41	426-004	三川町	助川館跡	城館跡	中世
42	426-011	三川町	助川遺跡	遺物包蔵地	平安時代
43	423-055	鶴岡市	土済遺跡	遺物包蔵地	平安時代
44	203-195	鶴岡市	本田遺跡	散布地	平安時代、中世
45	203-216	鶴岡市	日本国遺跡	遺物包蔵地	平安時代
46	203-006	鶴岡市	新形遺跡	遺物包蔵地	平安時代
47	203-044	鶴岡市	鶴ヶ岡城跡	城館跡	中世、近世
48	203-231	鶴岡市	致道館跡	学校跡	近世
49	424-104	鶴岡市	細谷館跡	城館跡	中世
50	424-116	鶴岡市	赤川城跡	城館跡	中世
51	424-133	鶴岡市	赤川経塚	経塚	近世
52	424-096	鶴岡市	狩谷野目館	城館跡	中世
53	423-047	鶴岡市	大川渡宮ノ前遺跡	集落跡	平安時代
54	423-020	鶴岡市	柳久瀬遺跡	散布地	平安時代
55	423-060	鶴岡市	柳久瀬経塚	経塚	近世
56	423-011	鶴岡市	柳久瀬館跡	城館跡	中世
57	424-098	鶴岡市	谷地館跡	城館跡	中世
58	424-090	鶴岡市	谷地遺跡	遺物包蔵地	平安時代
59	424-135	鶴岡市	漆畑遺跡	遺物包蔵地	平安時代
60	424-131	鶴岡市	富沢遺跡	遺物包蔵地	中世
61	424-083	鶴岡市	蛙塚遺跡	遺物包蔵地	平安時代
62	424-113	鶴岡市	二本松遺跡	集落跡	平安時代
63	424-124	鶴岡市	上野山遺跡	遺物包蔵地	縄文時代
64	424-127	鶴岡市	山崎遺跡	遺物包蔵地	縄文時代
65	424-003	鶴岡市	荒川館跡	城館跡	中世
66	424-019	鶴岡市	大櫻遺跡	遺物包蔵地	縄文時代
67	424-022	鶴岡市	一本松Ａ遺跡	遺物包蔵地	縄文時代
68	424-025	鶴岡市	一本松Ｂ遺跡	遺物包蔵地	縄文時代
69	424-030	鶴岡市	川代山Ｊ遺跡	遺物包蔵地	縄文時代
70	424-038	鶴岡市	川代山Ｉ遺跡	遺物包蔵地	縄文時代
71	424-051	鶴岡市	川代山Ｋ遺跡	遺物包蔵地	縄文時代
72	424-130	鶴岡市	黒瀬館跡	城館跡	中世
73	424-004	鶴岡市	五郎館跡	城館跡	中世
74	424-006	鶴岡市	松尾墳墓	墳墓	中世
75	424-007	鶴岡市	松尾城跡	城館跡	中世
76	424-009	鶴岡市	山館跡	城館跡	中世
77	424-020	鶴岡市	後田山Ｂ遺跡	遺物包蔵地	平安時代
78	424-024	鶴岡市	後田山Ａ遺跡	遺物包蔵地	縄文時代
79	424-052	鶴岡市	松岡Ｅ遺跡	墳墓	平安時代
80	424-079	鶴岡市	松岡Ａ遺跡	遺物包蔵地	平安時代
81	424-061	鶴岡市	松岡Ｃ遺跡	遺物包蔵地	縄文時代
82	424-070	鶴岡市	松岡Ｇ遺跡	遺物包蔵地	平安時代
83	424-072	鶴岡市	松岡Ｆ遺跡	遺物包蔵地	平安時代
84	424-049	鶴岡市	高寺Ｇ遺跡	遺物包蔵地	縄文時代
85	424-062	鶴岡市	高寺Ｆ遺跡	墳墓	中世
86	424-059	鶴岡市	高寺Ｅ館跡	城館跡	中世
87	424-068	鶴岡市	高寺Ｂ遺跡	墳墓	平安時代
88	424-076	鶴岡市	松岡Ｄ遺跡	遺物包蔵地	旧石器時代
89	203-043	鶴岡市	高間々遺跡	集落跡	平安時代、中世
90	203-162	鶴岡市	民田館跡	城館跡	中世
91	203-178	鶴岡市	天王原遺跡	散布地	平安時代、中世
92	203-020	鶴岡市	折橋館跡	城館跡	中世
93	203-083	鶴岡市	青竜寺遺跡	散布地	平安時代
94	203-096	鶴岡市	村東遺跡	散布地	縄文時代
95	425-027	鶴岡市	山添館跡	城館跡	中世
96	203-090	鶴岡市	勝福寺館跡	城館跡	中世

Ⅲ　調査の成果

1　調査の概要

今回の藤島城の発掘調査は、7度目のものとなり、校地北側の237.6㎡を対象に実施した。本丸北側の郭に相当する。『筆濃餘理』の添付図(第1図)で、松の木らしき樹木の絵とともに「霊屋」という施設名と「此曲輪、家中屋敷也ト云」という説明書きがある地点周辺である。農業高校移転以前の明治期の字限(あざきりず)図をみると、細かく耕作地として分筆されていたようである。さらに、長年校地として使用されたため、かつての面影を窺えるものは何もない。

調査では、表土を60～70cmほど重機で掘削し、ジョレンを用いて面整理作業を行い遺構検出作業を行った。

地表面から40～50cmまでは、近代以降の学校施設造営のためとみられる盛土整地による層である。それ以下は近世以前の層である。(第6図基本層序)

遺構検出面には所々近代以降の学校施設による撹乱跡が見られ、一部の遺構は破壊されていた。

2　遺構と遺物

以下、遺構と遺物について述べる。

A　遺構

遺構の数量は多くはない。遺構は調査区の東半分と南側に集中しており、西半分にはほとんど確認することができなかった。

地山は黄褐色の砂で、藤島城に伴う遺構では当時の表土であるシルト質で褐色の埋設土を、他の新しい遺構からは地山と現在の表土が混じった埋設土を観察できた。

遺物を伴う遺構は少なく、出土遺物も少量で遺存状態が悪く、明確な年代を決定できるものは少なかった。

遺構配置図(第5図)

全体的に柱穴が多く、他にいくつか井戸跡と思しき土坑を検出した。溝跡や堀跡、土塁の痕跡などは検出できなかった。また、柱穴で掘立柱建物跡の組み合わせを確認する事はできなかったが、ほとんどは掘立柱建物跡を構成した柱穴跡であろうと思われる。

校地や調査区の方角と同方位を向いた直径5cmほどの円礫が詰まった直径約60cmの柱穴列(SP2～10)が検出されたが、他の遺構より新しく特殊であるため、学校施設の柱基礎跡とみられる。他にもそれを囲むような溝跡、調査区南西部にある方形の溝跡、調査区西側に南北方向に走る溝跡などもあったが、これらも他の遺構より新しく、土管や塩ビパイプなど明らかに学校施設や基礎跡に伴うと判断できるものが出土した。また、調査区の西壁と南壁沿いには、緑青色の凝灰岩と思われる石材が並んでいたが、これらも学校施設の基礎と判断した。

(X=-136156:61　Y=-81092:27)グリッドと(X=-136164:59　Y=-81080:30)グリッドを結ぶあたりでは、表土が混入する撹乱状の滲みのような土色変化が観察できたので、3箇所にトレンチを入れて確認した。しかし、深さはまちまちで、5～30cmでそれらの土色変化は消え、断面を観察しても遺構のような層序を確認できず、遺物も全く出土しなかったことから、学校建物の雨落ち溝か一輪車のようなものが頻繁に通行したことにより泥質化し「土が膿んだ」状態になったものと判断した。

SP38(第6図)

調査区の北側、遺構が密集する地区にある。直径約50cm、深さ約20cmで遺物の出土はなかった。柱穴及び柱材を抜き取り埋め戻した跡と考えられる。この柱穴周辺の遺構もほとんど類似した状態であり、同様な柱跡と考えられる。

SK29(第6図)

調査区の北側、遺構が密集する地区にある。直径約65cm、深さ約15cmで遺物の出土はない。柱材を抜き取った跡と考えられる。

SE71(第6図)

調査区のほぼ中央やや北東側にある。直径約130cm、深さ約160cmで遺物が僅かに出土した。層序は5層に分けられるが、土色や性質が似ており、一気に埋め戻されたと思われる。深さや大きさから井戸跡と推測されるが、井戸枠材は出土せず、掘り返されて井戸枠も撤去さ

れた後に埋め戻されたと思われる。

SP30・SP31(第６図)

調査区の北壁近くにある。SP30 は直径約 50cm、深さは約 50cm で遺物の出土はなかった。SP31 は直径約 50cm、深さ 10cm で遺物の出土はなかった。SP30 は柱材の抜き取り痕で、SP31 は掘り起こした跡の可能性がある。

SX66(第７図)

調査区東壁面ほぼ中央にある。直径約 250cm、深さ約 100cm で遺物が出土した。今回の調査で最も大きな遺構であった。井戸跡の可能性が高く、周囲にはさらに大きな掘り方を確認できた。上部には、径 5cm 程度の円礫が詰まった SP9、SP10 の学校施設の柱基礎があった。遺構内には径約 20 ～ 30cm ほどの礫も出土したが、井戸枠や石組みの痕跡は確認できなかった。遺物は破片ではあるが､今回の調査で最も多く出土している。また、SK50 出土遺物と接合していることから、SK50 と同時期に廃絶したと考えられ、年代は出土遺物から 16 世紀代と思われる。

SK46・SK63・SP40(第８図)

調査区北側にある。SK46 は、短径約 50cm、長径約 120cm、深さ約 40cm で、土層の堆積状況から、３つとも柱材を抜き取り後埋め戻したと考えられる。SK63 は、重複関係より SK46 より古い時期のもので、径約 60cm、深さ約 20cm である。浅いが、土層の堆積状況から、柱材の抜き取り痕と考えられる。SP40 は他の遺構と重複関係はない。径約 40cm、深さ約 10cm で、極めて浅い単層の遺構であるが、柱穴と考えられる。

SP68・SK53(第８図)

調査区北側にある。SP68 は、長径約 70cm、短径約 50cm、深さ約 40cm である。層序の観察から、柱材の抜き取り痕と考えられる。重複関係から SK53 より古い。SK53 は長径約 100cm、短径約 60cm、深さ約 50cm である。層序の観察から､柱材の抜き取り痕と考えられる。

SP25(第８図)

調査区北側にある。SP25 は、径約 40cm、深さ約 35cm である。層序の観察から、柱材の抜き取り痕と考えられる。

SK51・SP13(第８図)

調査区東壁面やや北側にある。SK51 は径約 100cm、深さ約 20cm で比較的浅い。遺構は調査区外に延びていて全貌は確認できなかったが、形状は方形で、柱穴とは考えられない。SP13 は SK51 より新しく、径約 70cm、深さ約 60cm である。層序の観察から、柱材の抜き取り痕と考えられる。

SK84・SK83(第９図)

調査区南東隅にある。SK84 は短径約 110cm、長径約 160cm､深さ約 110cm のやや楕円形で遺物が出土した。最上部に学校施設のガス配管と思われる鋼管が横断している。堆積土は大きく２つに分けられ、下部の他の遺構と明らかに色が異なる黒褐色系シルトの土層と上部の褐色の地山砂を多く含む層である。このことから、何らかの機能を果たし黒褐色シルト層が堆積した後に、一気に埋め戻されたと考えられる。他の遺構とは異なり、堆積土内のブロックがはっきり観察できることや伴出した遺物の年代から、近代以降と考えられる。SK84 より新しい SK83 は 直径約 80cm、深さ約 40cm ほどのやや楕円形で、遺物が出土した。堆積土から、桶状のものを埋設した跡で、埋め戻した後に桶状のものは腐食したとみられる。学校施設の一部と思われる。

SK54(第９図)

調査区のやや北側のほぼ中央部にある大型土坑。他の遺構と重複関係はなく、直径約 90cm、短径約 80cm、深さ約 60cm のやや楕円形をしている。堆積土は４層からなるが、似た土層であることから、一度に埋め戻された可能性が高い。遺物の破片が僅かに出土し、概ね 16 世紀ごろのものと考えられる。

SK50(第９図)

調査区東側のやや北側にある。長径約 100cm、短径約 70cm、深さ約 50cm で、平面形がやや不定形である。柱穴とその抜き取り痕である可能性が高い。遺物が比較的多く出土した。SX66 出土遺物と接合していることから、SX66 とほぼ同時期の 16 世紀ごろに廃絶したと考えられる。

SK23(第９図)

調査区北側の東壁面にある。直径約 110cm、深さ約 100cm である。層序の観察から、幅 20cm の柱材の抜き取り痕と考えられる。明確に柱穴と判断できる痕跡があった遺構はここだけであった。砥石が出土した。

B　遺物

今回の藤島城跡の発掘調査で見つかった遺物は、出土量では整理箱で 4 箱と決して多くはなかった。残存状況も破片が多く、明確な時期特定も困難であったが、時期は大きく 2 つに分けられる。一つは中世末の 15 ～ 16 世紀頃の遺物で、藤島城存続時と同時期の遺物である。もう一つは近現代の遺物で、山形県立庄内農業学校 (現 : 山形県立庄内農業高等学校) に伴うものである。近世の遺物は出土していない。これらの傾向は以前の調査と同じである。以下、出土遺構ごとに遺物について述べていく。

第 10 図

1 は SE71 より出土した珠洲系陶器の甕の胴体部の破片である。外面にはタタキ、内面にはアテの調整痕を確認できた。

2 は SD20 より出土した瓦器の火鉢の破片である。図上復元すると直径 130mm、器高 80mm ほどの大きさで、上部に径 18mm の穿孔が 2 つ施され、5 つほど存在したと思われる。全体に煤けている。近現代のものである。

3 は SK23 より出土した砥石の破片である。青緑色をしている。紐を通したと思われる穿孔や使用による擦痕を観察できる。

4 は SK23 より出土した陶器碗の破片である。鉄褐色の飴釉が内外に施釉されており、天目茶碗と思われる。産地は瀬戸美濃であると思われる。

5 は SK50 から出土した陶器の皿である。瀬戸美濃の灰釉皿で内外に施釉されており、見込部分には菊花状の印刻がされている。底部には輪トチンの付着痕を観察できる。また、割れ口が被熱し煤が付着していることから、灯明皿に二次転用されたと考えられる。大窯 1 期の所産と考えられる。

6 は SK50 から出土した陶器の皿の破片で、SX66 出土の破片とも接合した。瀬戸美濃の灰釉皿で内外が施釉されており、底部の高台内部は黒く塗られている。5 と同時期である。

7 は SK50 から出土した磁器の碗の破片である。高台付きで内面に花紋と思われる文様が描かれている。文様や高台の作りから、15 世紀の景徳鎮産の染付花卉紋碗と推測される。

8 は SK50 から出土した瓦器の香炉と思われる破片である。底部の一部のみ残存しており、高台が付いている。外面に植物紋の印刻が施されている。

9 は SK50 から出土した石製品である。円礫で一部被熱している。磨り石として分類した。

10 は SK53 から出土した陶器の破片である。瀬戸美濃の灰釉皿で内外とも施釉されている。

11 は SK54 から出土した陶器の破片である。瀬戸美濃の灰釉皿で内外とも施釉されている。大窯 1 期の時期と考えられる。

12 は SK54 から出土した陶器の破片である。瀬戸美濃の灰釉皿で内外とも施釉されている。見込にはトチンの目跡がある。底部高台内部に煤が付着している。破損後に底部高台内を燈明皿に転用した可能性がある。11 とは別個体と見られるが、同時期と考えられる。

13 は SK54 から出土した古銭である。北宋銭の「元祐通寶」である。銭名もはっきり確認できる比較的良好な状態である。

14 は SK84 から出土した陶器の破片である。瀬戸美濃の灰釉皿で内外ともに施釉されている。

15 は SK84 から出土した陶器の破片である。無施釉で、珠洲系の壺と思われる。

16 は SK84 から出土した磁器の皿である。直径は 112mm ほどであったとみられる。染付で内外とも施文されているが、底部と見込部分には施釉されていない。

17 は SK84 から出土した磁器である。染付の碗と思われ、外面に花状の施文が施されている。

18 は SK84 から出土した土師器である。平安時代の甕の一部と思われる。だいぶ摩耗している。

19 は SK84 から出土した石製品である。砥石の破片で、中砥と思われる。

20 は SK84 から出土した石製品である。砥石の破片で、中砥と思われる。

21 は SK84 から出土した古銭である。三枚が癒着していると思われ、銭名は判読不能であるが、中央には四角い穴があり、前近代の貨幣ではある。籾が付着したような痕跡を確認できる。

22 は SK84 から出土した金属製品である。近現代の鉛管と思われ、鋸で切断したような波紋がある。

23 は SK84 から出土した鉱滓である。

24 は SK111 から出土した磁器である。口縁部だけの破片であるが、内外に施文された染付である。16 世紀ごろの輸入磁器とみられる。

25 は SK112 から出土した陶器である。口縁部の破片であり、瀬戸美濃の皿である。

26 は SP3 から出土した磁器である。青磁の碗で外面に雷文が施されている。

27 は SP5 から出土した石製品である。石鉢の破片で、内外面とも被熱しており、内面が摩耗し使用した痕跡がある。

28 は SP7 から出土した陶器である。鉢の破片で、鉄釉が施された近現代の鉢の破片である。

29 は SP7 から出土した磁器である。薄手で染付の花瓶であるとみられる。近現代のものと思われる。

第 11 図

30 は SP8 から出土した陶器である。内外に施釉された近現代の鉢と思われる。

31 は SP10 から出土した磁器である。青磁の碗で外面に蓮弁文と思われる文様の一部を確認できる。15 ～ 16 世紀頃のものが新しい遺構に混入したとみられる。

32 は SP39 から出土した陶器である。瓷器系の甕の破片である。

33 は SP57 から出土した石製品である。砥石の破片で、中砥と思われる。

34 は SP92 から出土した磁器である。青磁花瓶の口縁部の破片である。

35 は SP92 から出土した磁器である。染付の碗の口縁部の破片であり、外面に植物紋が施されている。近現代のものと思われる。

36 は SP114 から出土した磁器である。青磁の碗の破片である。

37 は SX18 から出土した磁器である。青磁碗の口縁部の破片である。

38 は SX19 から出土したガラス製品である。近現代のインク瓶で、底部に「M」と陽刻されている。

39 は SX66 から出土した陶器である。瀬戸美濃の灰釉皿である。大窯 1 期のものと推定される。

40 は SX66 から出土した陶器である。瀬戸美濃の灰釉皿で、底部にトチンの痕がある。

41 は SX66 から出土した磁器である。青磁の碗で外面には弧状の蓮弁紋が施されている。割れ口を膠状のもので接着している。概ね 16 世紀代のものと思われる。

42 は SX66 から出土した磁器である。青磁の碗で、内面に唐草状の劃花紋が施されている。

43 は SX66 から出土した陶器である。瓷器系の甕の破片である。

44 は SX66 から出土した陶器である。珠洲系の甕の破片である。

45 は SX66 から出土した陶器である。珠洲系の擂鉢の破片である。

46 は SX66 から出土した陶器である。珠洲系の壺の破片である。

47 は SX66 から出土した石製品である。石鉢の口縁部で、被熱している。48 と同一個体と思われる。

第 12 図

48 は SX66 から出土した石製品である。鉢の破片で、被熱している。47 と同一個体と思われる。

49 は SX66 から出土した金属製品である。釘と見られ、全体に錆びている。

50 は SX66 から出土した古銭である。破片で、一部溶融した痕跡が見られる。銭名は読み取れない。

51 は SX66 から出土した金属製品である。用途不明の金属製品で、上部が欠損している。釘である可能性がある。

52 は面整理作業で出土した磁器である。染付の碗である。

53 は面整理作業で出土した瓦器である。火鉢の破片である。近代以降のものとみられる。

54 は面整理作業で出土した瓦器である。火鉢の破片である。近代以降のものとみられる。

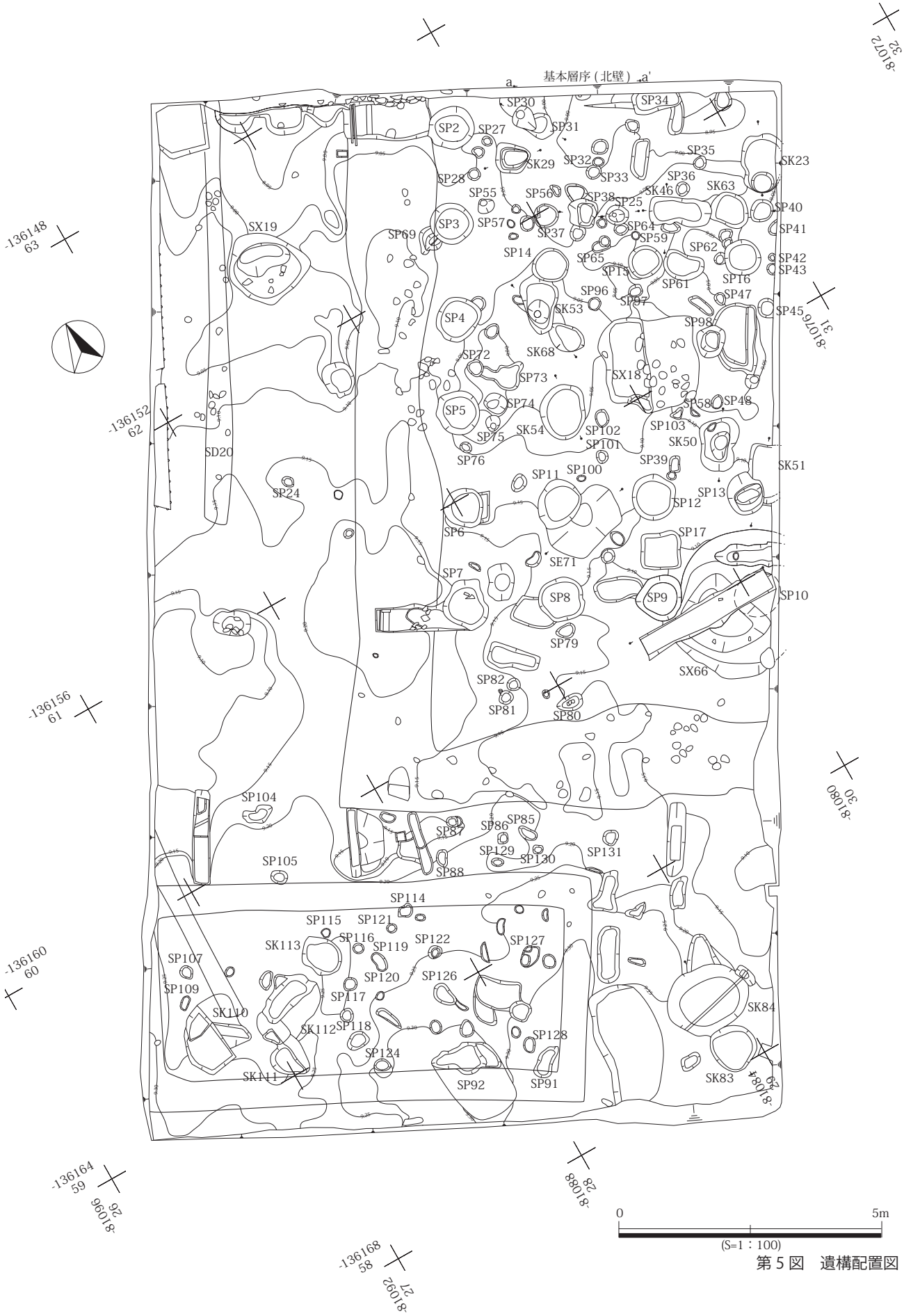
55 は面整理作業で出土した平瓦で、学校施設のものとみられる。

56 は面整理作業で出土した石製品である。砥石で中砥と見られる。

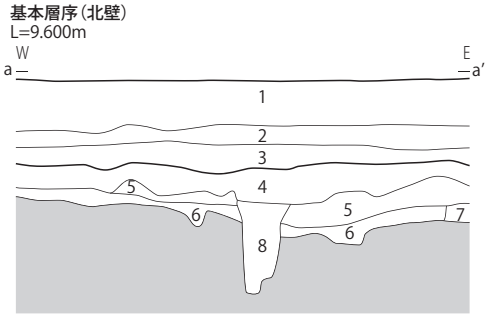
57 は面整理作業で出土した磁器である。青磁の碗で、見込部分に植物紋の印刻が施されている。被熱している。

58 は面整理作業で出土した陶器である。珠洲系の甕の破片である。

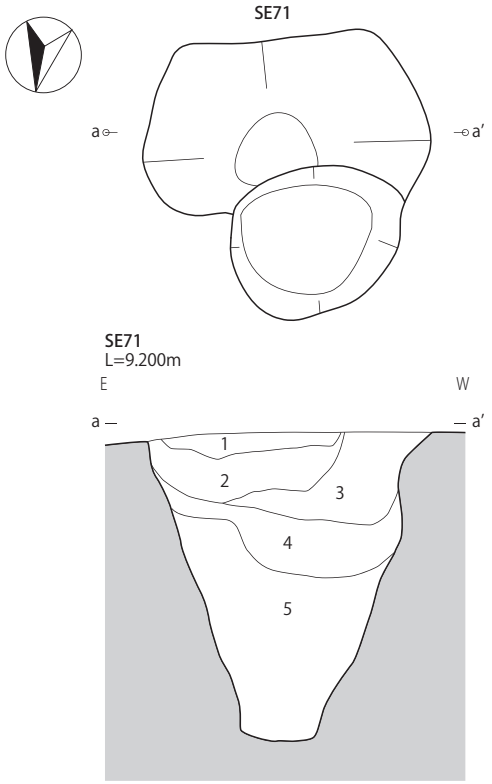
59 は面整理作業で出土した古銭である。「開元通寶」で、銭名ははっきりしている。


基本層序（北壁）
a
a'
SP30
SP34
SP2
SP27
SP31
SP35
SK23
SP29
SP32
SP33
SP36
SK63
SP28
SP55
SP56
SP38
SK46
SP25
SP40
SP3
SP57
SP37
SP64
SP41
SX19
SP69
SP59
SP62
SP14
SP65
SP42
SP43
SP13
SP16
SP61
SP96
SP47
SP97
SP45
SP4
SK53
SP98
SP72
SK68
SP73
SX18
SP58
SP48
SP5
SP74
SP103
SP75
SK54
SP102
SP101
SK50
SD20
SP76
SP39
SK51
SP11
SP100
SP24
SP13
SP12
SP6
SP17
SE71
SP7
SP8
SP9
SP10
SP79
SX66
SP82
SP81
SP80
SP104
SP87
SP86
SP85
SP129
SP130
SP131
SP105
SP88
SP114
SP115
SP121
SP116
SP122
SP127
SK113
SP119
SP107
SP120
SP126
SP109
SP117
SK110
SK112
SP118
SP128
SP124
SK111
SP92
SP91
SK84
SK83
0
5m
(S=1：100)

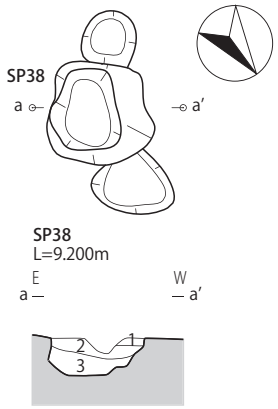
第５図　遺構配置図



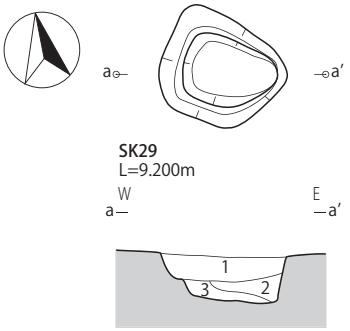
基本層序 (北壁)
1. 10YR3/3　暗褐色　砂質シルト　現表土。しまっている。径 3 ～ 5mm の小礫を多く含む。径 5 ～ 10cm の礫を少し含む。
2. 2.5Y5/3　黄橙色　砂　整地に伴う均質な砂層。しまっているが脆い。
3. 10YR4/2　灰黄褐色　シルト質砂　現代整地層。しまっている。土管片含む。径 1 ～ 5cm の礫を含む。
4. 2.5Y3/1　黒褐色　シルト　近世表土。しまっている。炭化物を含む。径 5 ～ 10cm 礫を少量含む。3 層との境界から近代陶磁器出土。
5. 7.5YR4/2　灰褐色　砂質シルト　ややしまっている。地山 (10YR5/4 にぶい黄褐色　砂) 層を斑状に 3% 含む。4 層と 6 層の漸移層。
6. 10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト　ややしまっている。
7. 10YR4/3　にぶい黄褐色　砂質シルト　掘り込み。SP34 の覆土。
8. 10YR3/2　黒褐色　シルト　柱根。やや締まりに欠ける。



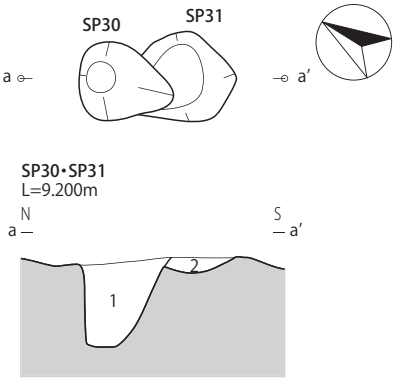
SE71
1. 10YR4/4　褐色　シルト質砂　非常にしまっている。炭化物を含む。地山砂 (7.5YR6/6 橙色) を斑状に 8％含む。
2. 7.5YR6/6　橙色　砂　非常にしまっている。炭化物をわずかに含む。1 層土と地山をブロック状に 10％含む。以下、地山と表土を固めた層。
3. 7.5YR6/6　橙色　砂　非常にしまっている。炭化物を含む。2 層土より大きなブロック状の 1 層土を層状に 13％含む。
4. 7.5YR6/6　橙色　砂　しまっている。炭化物を少量含む。1 層土を斑状に 10％含む。
5. 7.5YR6/6　橙色　砂　しまっている。炭化物を少量含む。1 層土を層状に 8％含む。



SP38
1.2.5Y5/4　黄褐色　細砂　地山崩落土。
2.10YR3/2　黒褐色　シルト　しまっている。炭化物を少量含む。
3.2.5Y4/4　オリーブ褐色　シルト質砂　非常にしまっている。2.5Y4/1 黄灰色シルト質砂を斑状に 10％含む。炭化物を微量に含む。



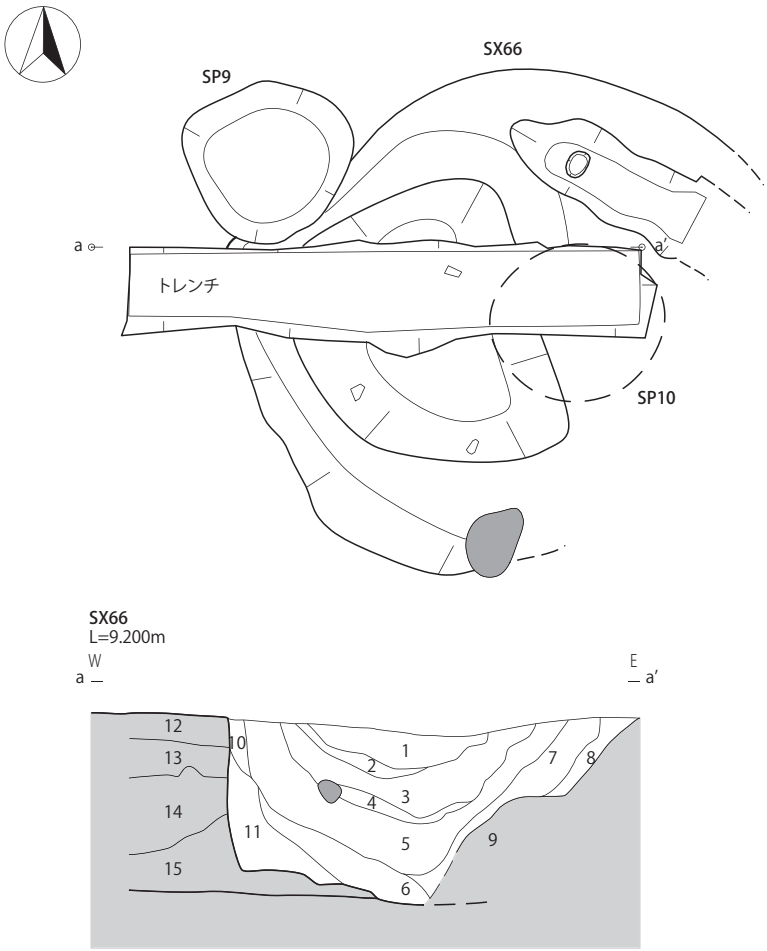
SK29
1.10YR4/4　褐色　砂質シルト　非常にしまっている。10YR3/3 暗褐色微砂質シルトを斑状に 20％含む。炭化物を少量含む。
2.10YR4/2　灰黄褐色　微砂質シルト　しまっている。1 層よりシルト分多い。2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルトを斑状に 5％含む。
3.2.5Y5/4　黄褐色　細砂　しまっているがもろい。2 層土を斑状に 3％含む。地山土に 2 層土が混入したもの。



SP30・SP31
1.10YR4/2　灰黄褐色　砂質シルト　しまっている。2.5Y4/4 オリーブ褐色微砂（地山）を斑状に 30％含む。炭化物を含む。
2.10YR4/3　にぶい黄褐色　砂質シルト　しまっている。2.5Y4/4 オリーブ褐色微砂（地山）を斑状に 40％含む。炭化物を含む。柱抜き取り痕か。

0　1m
S=1:40

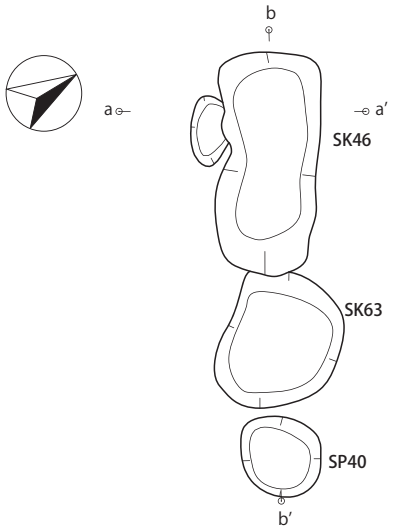
第 6 図　基本層序（北壁）、SP38、SK29、SE71、SP30・31

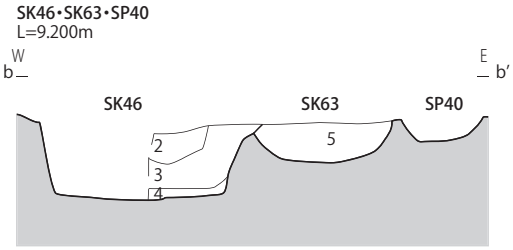


SX66
1.10YR3/2　黒褐色　砂質シルト　炭化物を少量含む。2.5Y3/2 黒褐色細砂ブロックを 1％含む。
2.10YR5/4　にぶい黄褐色　砂　炭化物を少量含む。1 層土が斑状に 3％含む。
3.10YR4/2　灰黄褐色　シルト質砂　炭化物を少量含む。2.5Y5/6 黄褐色砂を斑状に層下部を中心に 10％含む。
4.10YR4/2　灰黄褐色　シルト質砂　炭化物を多量に含む。しまり無し。
5.10YR3/2　黒褐色　シルト質砂　炭化物を少量含む。地山ブロックを 3％含む。しまりあり。瀬戸美濃皿片出土。
6.10YR3/3　暗褐色　シルト質砂　地山砂を斑状に 10％含む。炭化物を微量含む。
7.10YR5/3　にぶい黄褐色　砂　しまっている。炭化物含む。5 層土をブロック状に 3％含む。地山砂をブロック状に 5％含む。越前系甕片含む。
8.10YR4/2　灰黄褐色　シルト質砂　しまっている。炭化物を多く含む。地山をブロック状に 1％含む。
9.2.5Y5/4　黄褐色　砂　7・8 層土を斑状に 3％含む。炭化物を少量含む。
10.2.5Y6/3　にぶい黄色　砂　12 層土をブロック状に 3％含む。しまっている。
11.2.5Y5/4　黄褐色　砂　しまっている。炭化物を少量含む。10YR3/2 黒褐色砂質シルトを斑状に 8％含む。
12.10YR3/2　黒褐色　シルト質砂　しまっている。地山を斑状に 8％含む。
13.2.5Y5/4　黄褐色　砂　しまりあり。10YR3/2 黒褐色シルトを斑状に 8％含む。炭化物を微量に含む。
14.2.5Y4/6　オリーブ褐色　砂　しまりあり。10YR3/2 黒褐色シルトを斑状に 5％含む。炭化物を少量含む。
15.2.5Y5/6　黄褐色　砂　しまり有。炭化物を微量に含む。10YR3/2 黒褐色シルトブロックを 1％含む。

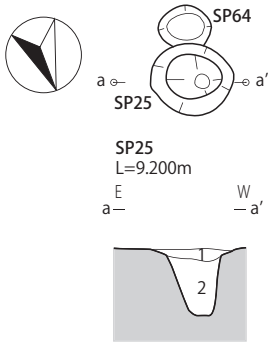
0　1m
S=1:40

第 7 図　SX66

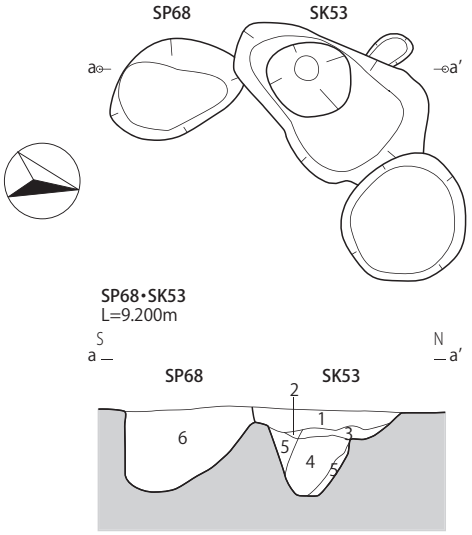




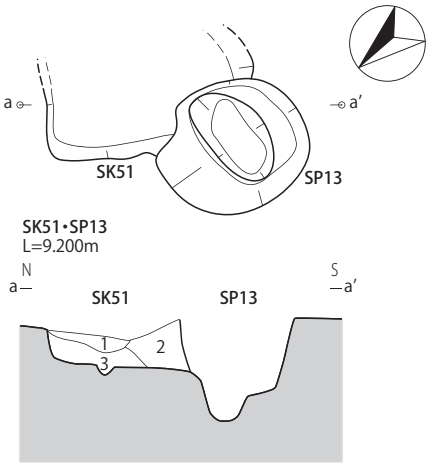
SK46・SK63・SP40
1.10YR3/3　暗褐色　砂質シルト　非常にしまっている。炭化物を微量に含む。2.5Y5/4 黄褐色（地山砂）ブロックを 1％含む。
2.10YR4/2　灰黄褐色　シルト質砂　非常にしまっている。炭化物を多く含む。焼土片を微量、地山ブロックを 3％含む。
3.10YR4/3　にぶい黄褐色　砂質シルト　非常にしまっている。地山を斑状に 5％含む。炭化物を微量含む。
4.2.5Y5/4　黄褐色　砂　地山に 3 層土が斑状に 10％含む。
5.10YR5/3　にぶい黄褐色　非常にしまっている。炭化物をわずかに含む。地山砂ブロックを 2 ％含む。



SP25
1.10YR4/3　にぶい黄褐色　微砂質シルト　非常にしまっている。炭化物小片焼土を微量に含む。2.5Y4/4 オリーブ褐色砂（地山）をブロック状に 3％含む。
2.10YR3/3　暗褐色　微砂質シルト　炭化物小片微量に含む。地山ブロックを 1％含む。



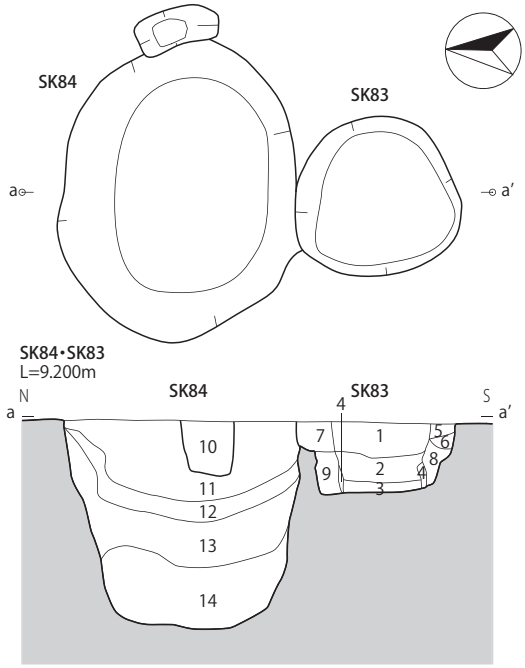
SP68・SK53
1. 10YR5/3　にぶい黄褐色　シルト　炭化物をわずかに含む。2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質シルトを斑状に 8 ％含む。
2.10YR6/6　明黄褐色　細砂　地山ブロック。
3.10YR6/6　明黄褐色　砂　地山崩落土。2 層土ブロック状に 30％含む。
4.10YR4/2　灰黄褐色　砂質シルト　しまっている。 炭化物・焼土小ブロックを少量含む。
5.10YR6/4　にぶい黄橙色　砂　もろい。地山の埋土。
6.10YR4/4　褐色　砂　しまっている。炭化物を少量含む。



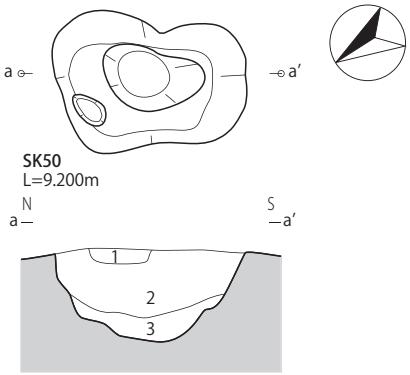
SK51・SP13
1.10YR4/2　灰黄褐色　砂質シルト　非常にしまっている。炭化物と焼土ブロックを多く含む。10YR5/4 にぶい黄褐色地山砂ブロックを 5％含む。基本層序最下層と同じ落ち込み。
2.10YR3/1　黒褐色　砂質シルト　しまっている。炭化物を多く含む。地山ブロックを 10％含む。
3.10YR2/2　黒褐色　シルト　しまっている。粘性あり。炭化物をわずかに含む。焼土ブロックをわすかに、地山ブロック 1％含む。

0　1m
S=1:40

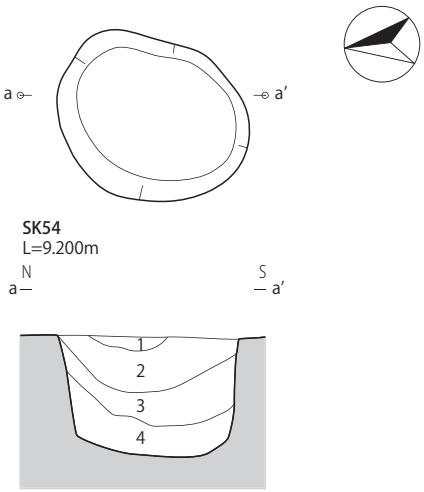
第 8 図　SK46・SK63・SP40、SP68・SK53、SP25、SK51・SP13



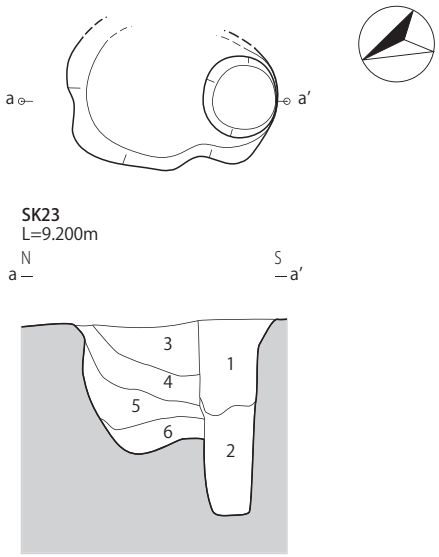
SK84・SK83
1. 2.5Y4/4　オリーブ褐色　砂質シルト　しまっている。炭化物・焼土小ブロックを含む。10YR3/2 黒褐色シルトブロックを 3%含む。10GY7/1 明緑灰色小礫片（校舎基礎凝灰岩）を含む。
2.2.5Y4/4　オリーブ褐色　砂質シルト　しまっている。1 層との境に 10YR2/1 黒色シルトが層状に堆積。2.5Y5/3 黄橙色地山砂を斑状に 8%含む。
3.10YR2/1　黒色シルト　粘性有。ややしまっている。桶の堆積土。
4.7.5YR2/3　極暗褐色　シルト　しまりに欠ける。桶木質部。
5.10YR5/4　にぶい黄褐色　シルト質砂　しまっている。10YR3/2 黒褐色シルトブロックを 5%含む。
6.10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト質砂　しまっている。10YR3/2 黒褐色のシルトブロックを 5%含む。校舎基礎小礫片を含む。
7.10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト質砂　6 層土に大粒の炭化物を含む。
8.2.5Y4/4　オリーブ褐色　細砂　2.5Y4/4 オリーブ褐色細砂地山土に炭化物を含む。埋土。
9.2.5Y4/4　オリーブ褐色　細砂　地山土に 10YR2/3 黒褐色シルトを斑状に 8%含む。
10.10YR3/3　暗褐色　砂質シルト　しまっている。12 層に地山砂が斑状に 1%含む。径 5cm の鋼管埋設。
11.10YR2/2　黒褐色　シルト　しまっている。 炭化物小片を含む。
12.2.5Y4/4　オリーブ褐色　細砂　地山埋土。
13.10YR2/1　黒色　シルト　しまりに欠ける。地山ブロックを 1%含む。
14.10YR2/1　黒色　シルト　しまりに欠ける。地山を斑状に 5%含む。



SK50
1.5Y2/2　オリーブ黒色　シルト質砂　非常にしまっている。炭化物を含む。砥石出土。
2.10YR3/2　黒褐色　砂質シルト　非常にしまっている。炭化物を多く含む。焼土ブロックをわずかに含む。
3.10YR3/2　黒褐色　砂質シルト　もろい。10YR4/6 褐色砂（地山）を斑状に 40%含む。崩落土。



SK54
1.10YR2/2　黒褐色　砂質シルト　しまっている。炭化物を含む。2 層土を斑状に 30%含む。
2.10YR2/3　黒褐色　砂質シルト　しまっている。炭化物を多く含む。地山（2.5Y4/6 オリーブ褐色砂）を斑状に 5%含む。
3.10YR4/2　灰黄褐色　砂質シルト　粘性有。しまっている。2.5Y5/2 暗灰黄色粘土ブロックを 10%含む。炭化物を少量含む。遺物出土。
4.10YR3/1　黒褐色　シルト　しまりにやや欠ける。炭化物をわずかに含む。粘土ブロックを 1%含む。



SK23
1.2.5Y4/2　暗灰黄色　シルト質砂　しまっている。地山ブロックを 5%含む。炭化物を少量含む。砥石出土。
2.10YR3/4　暗褐色　シルト質砂　しまっている。炭化物を含む。地山ブロックを 10%含む。
3.10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性やや有。しまっている。炭化物を少量含む。2.5Y5/4 黄褐色細砂（地山）を斑状に 10%含む。
4.10YR2/2　黒褐色　シルト質砂　しまっている。炭化物を少量含む。3 層より多い。地山ブロックを 2%含む。
5.2.5Y4/2　暗灰黄色　シルト質砂　しまっているがもろい。4 層より砂分が多い。炭化物を微量に含む。地山ブロックを 1%含む。
6.2.5Y3/2 黒褐色　砂　炭化物を微量に含む。しまっているがもろい。

0　1m
S=1:40

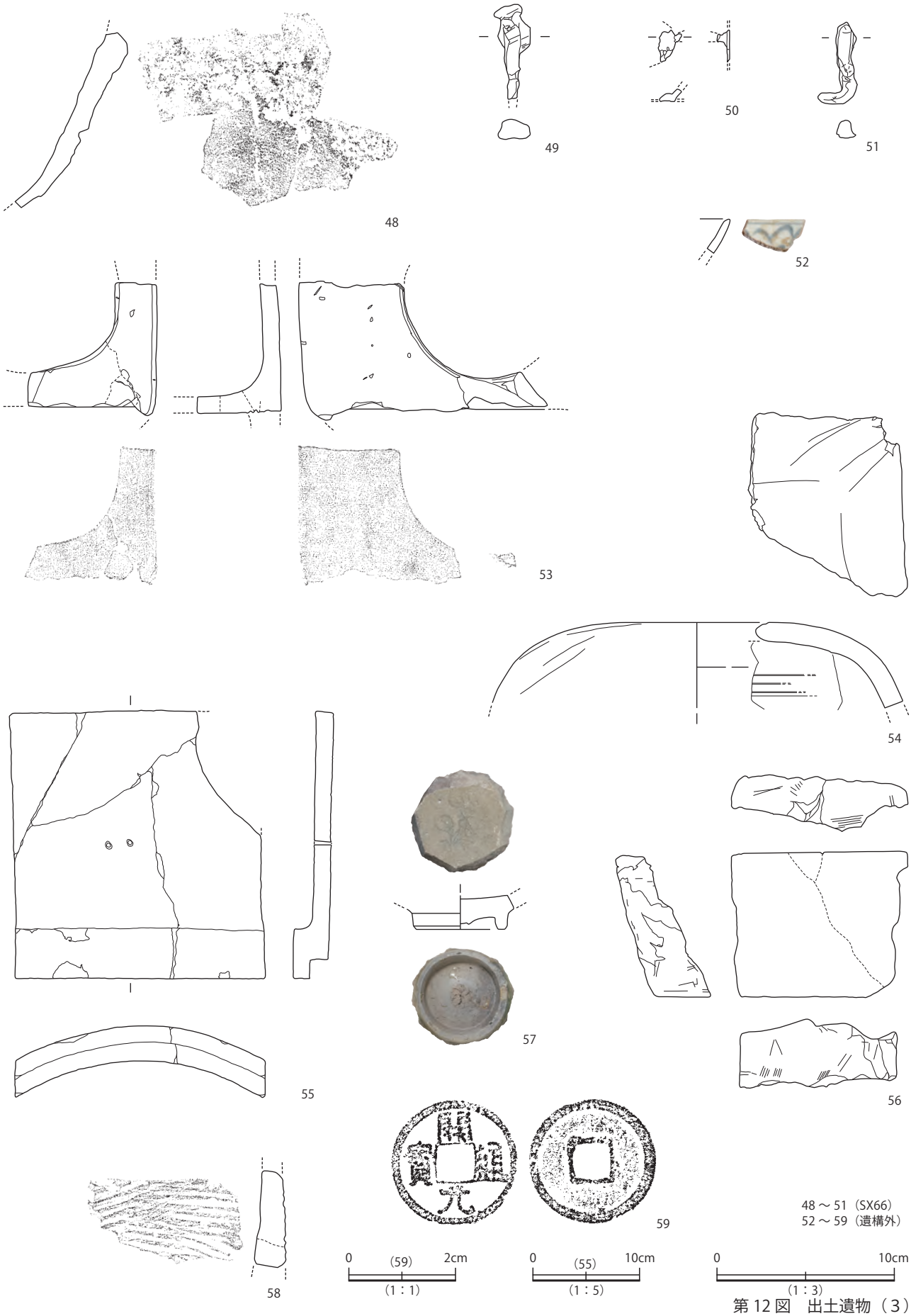
第 9 図　SK84・SK83、SK54、SK50、SK23

1（SE71）　2（SD20）　3・4（SK23）
5 ～ 9（SK50）　10（SK53）11 ～ 13（SK54）
14 ～ 23（SK84）24（SK111）25（SK112）
26（SP 3）　27（SP 5）28・29（SP 7）

第 10 図　出土遺物（1）

30（SP 8）　31（SP10）　32（SP39）　33（SP57）　34・35（SP92）
36（SP114）　37（SX18）　38（SX19）　39～47(SX66)

第 11 図　出土遺物（2）


48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
48～51（SX66）
52～59（遺構外）
0 (59) 2cm
(1：1)
0 (55) 10cm
(1：5)
0 10cm
(1：3)

第 12 図　出土遺物（3）

表２　遺物観察表（１）

図版番号		種別	器種	遺構	層位	寸法（㎜） 口径	底径	器高	調整 外面	内面	底部	装飾・施釉	備考
10	1	陶器	甕	SE71	F			(60.0)	タタキ	アテ		無施釉	珠洲系
10	2	瓦器	火鉢	SD20		(130.0)		(80.0)	ロクロ	ロクロ		内外施釉	全体被熱
10	3	石製品	砥石	SK23	F	(71.5)	(45.5)	(34.5)					仕上げ砥　穿孔あり
10	4	陶器	碗	SK23				(25.0)	ロクロ	ロクロ		内外施釉	天目茶碗
10	5	陶器	皿	SK50	F	(120.0)	66.0	26.0	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り 砂目	内外施釉	割口に煤付着 灯明皿に転用 見込に菊花印刻　瀬戸美濃
10	6	陶器	皿	SK50 SX66	F		(58.0)	(16.0)	ロクロ	ロクロ		内外施釉	瀬戸美濃
10	7	磁器	碗	SK50	F		(58.0)	(22.0)	ロクロ	ロクロ		内外施釉	青花　内面に植物紋
10	8	瓦器	香炉	SK50	F		(114.0)	(47.0)	ロクロ ミガキ	ロクロ	ヘラ切り ナデ	無施釉	外面線刻紋様
10	9	石製品	磨り石	SK50	F	65.0	63.0	61.0					被熱
10	10	陶器	皿	SK53	F			(16.0)	ロクロ	ロクロ		内外施釉	瀬戸美濃
10	11	陶器	皿	SK54	F			(16.0)	ロクロ	ロクロ		内外施釉	瀬戸美濃
10	12	陶器	皿	SK54	F		(54.0)	(11.0)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り	内面施釉	内面に砂目　底部に煤付着 瀬戸美濃
10	13	金属製品	古銭	SK54		24.0	24.0	1.0					「元祐通寶」か
10	14	陶器	皿	SK84	F			(21.0)	ロクロ	ロクロ		内外施釉	瀬戸美濃
10	15	陶器	壺	SK84	F			(26.0)	タタキ	アテ		無施釉	珠洲系
10	16	磁器	皿	SK84	F	(112.0)	(42.0)	25.0	ロクロ	ロクロ		内外施釉	
10	17	磁器	碗	SK84	F			(22.0)	ロクロ	ロクロ		内外施釉	
10	18	土師器	甕	SK84	F	(34.0)	(35.0)	(9.0)					被熱
10	19	石製品	砥石	SK84	F	(77.0)	(38.0)	(20.0)					中砥
10	20	石製品	砥石	SK84	F	(31.5)	(24.0)	(14.0)					中砥
10	21	金属製品	古銭	SK84	F	33.0	28.0	8.0					全体に籾殻付着＋錆 三枚融着　古銭名不明
10	22	金属製品	用途不明製品	SK84	F	46.0	(32.0)	(10.5)					近現代か
10	23	金属製品	鉱滓	SK84	F	(68.0)	(47.0)	(20.0)					
10	24	磁器	碗	SK111	F	(120.0)		(14.0)	ロクロ	ロクロ		内外施釉	青花
10	25	陶器	皿	SK112	F			(15.0)	ロクロ	ロクロ		内外施釉	瀬戸美濃
10	26	磁器	碗	SP3				(12.0)	ロクロ	ロクロ		内外施釉	外面に雷文　青磁
10	27	石製品	石鉢	SP5	F			(42.0)	鑿痕	鑿痕			内面・側面被熱 内面 (下半) 摩耗 外面剥離
10	28	陶器	鉢	SP7	F			(41.0)	ロクロ	ロクロ		内外施釉	鉄釉　瀬戸美濃　近現代
10	29	磁器	花瓶	SP7	F			(22.0)	ロクロ	ロクロ		内面施釉	近現代
11	30	陶器	鉢	SP8	F			(41.5)	ロクロ	ロクロ		内外施釉	近現代
11	31	磁器	碗	SP10	F			(25.0)	ロクロ	ロクロ		内外施釉	外面に蓮弁紋　青磁
11	32	陶器	甕	SP39				(41.0)	ナデ	ナデ		内外施釉	瓷器系陶器
11	33	石製品	砥石	SP57		(68.0)	(50.0)	(41.0)					中砥
11	34	磁器	花瓶	SP92	F			(25.0)	ロクロ	ロクロ		内外施釉	青磁
11	35	磁器	碗	SP92	F			(23.0)	ロクロ	ロクロ		内外施釉	染付　外面植物紋 近現代か
11	36	磁器	碗	SP114				(16.0)	ロクロ	ロクロ		内外施釉	青磁
11	37	磁器	碗	SX18	F			(19.0)	ロクロ	ロクロ		内外施釉	青磁
11	38	ガラス製品	瓶	SX19		28.0	50.0	62.0					底部に「M」字
11	39	陶器	皿	SX66	F	(116.0)		(23.0)	ロクロ	ロクロ		内外施釉	瀬戸美濃
11	40	陶器	皿	SX66	F		(58.0)	(13.0)	ロクロ	ロクロ	砂目	内外施釉	瀬戸美濃

表３　遺物観察表（２）

図版番号		種別	器種	遺構	層位	寸法（㎜） 口径	底径	器高	調整 外面	内面	底部	装飾・施釉	備考
11	41	磁器	碗	SX66		(132.0)		(30.0)	ロクロ	ロクロ		内外施釉	割口に膠付着 外面鎬蓮弁紋　青磁
11	42	磁器	碗	SX66	F			(29.0)	ロクロ	ロクロ		内外施釉	内面に唐草状紋　青磁
11	43	陶器	甕	SX66	F			(135.0)	ナデ	ナデ		内外施釉	瓷器系陶器
11	44	陶器	甕	SX66	F			(44.0)	ロクロ タタキ	ロクロ アテ		無施釉	珠洲系
11	45	陶器	擂鉢	SX66	F			(47.0)	ロクロ	ロクロ		無施釉	内面に卸目　珠洲系
11	46	陶器	壺	SX66	F			(107.0)	ナデ	ナデ		無施釉	珠洲系
11	47	石製品	石鉢	SX66	F			(54.5)	鑿痕	鑿痕		無施釉	被熱
12	48	石製品	石鉢	SX66	F			(93.5)	鑿痕	鑿痕		無施釉	被熱　外面剥離 内面下半は摩耗
12	49	金属製品	釘	SX66	F	(53.0)	(20.0)	11.0					全体が錆びている 先端 (下端) 損傷
12	50	金属製品	古銭	SX66	F	(18.0)	(13.0)	(7.0)					熱で融けた状態か
12	51	金属製品	用途不明製品	SX66	F	(46.0)	(22.0)	10.0					釘か
12	52	磁器	碗	6127G				(19.0)	ロクロ	ロクロ		内外施釉	染付
12	53	瓦器	火鉢	6128G				(81.0)		ナデ		無施釉	近代以降
12	54	瓦器	火鉢	6128G				(48.0)				無施釉	近代以降
12	55	瓦	平瓦	6128G		261.0	243.0	69.0	ナデ	ナデ		内外施釉	鉄釉　釘孔２か所
12	56	石製品	砥石	6128G									中砥
12	57	磁器	碗				50.0	(19.0)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り	内外施釉	見込に植物紋印刻 被熱　青磁 RP2
12	58	陶器	甕	線掘り				(48.0)	タタキ	アテ		無施釉	珠洲系
12	59	金属製品	古銭			23.5	23.5	1.0					「開元通寶」

Ⅳ　調査のまとめ

これまで藤島城跡は、6次におよぶ発掘調査が実施され、今回は第7次発掘調査である。

以前の調査では、遺構の分布密度が高く多くの柱穴、土坑、井戸跡などの他、土塁の痕跡や内堀跡などが検出され、遺物も多く出土している。

今回の発掘調査は、山形県立庄内農業高等学校ライスセンター改築事業として、平成30年度に237.6㎡を対象として実施した。

調査区全体に、近現代の盛土が施されていたが、学校施設の基礎や掘り込みなどによる削平を部分的に受けていた。検出遺構は質量ともに以前の調査と比べると劣る。調査区の東半分に遺構が多く、西側には少ない。南側の土坑やピットは学校施設に伴うものと思われ、城跡のものと断定できる遺構は少ない。全体的に、検出した遺構は柱穴が殆どで、調査区の制限等もあり掘立柱建物など明確な建物跡を確認することはできなかった。

また、遺物の出土量も少なく破片が多かったことから、明確な年代を推定することは難しかった。

以下、今年度の成果をまとめる。

遺構については、SX66、SE71の井戸跡とみられる大型遺構を確認した。過去の調査では、井戸枠を伴う井戸跡も検出しているが、今回の調査ではいずれも井戸枠の痕跡も確認できなかった。このことから、城が機能している期間に井戸枠を掘り出し廃絶、または転用したと推測される。

SK23、SK50、SK51、SK54などは掘立柱建物に伴う大型の柱穴とみられる。明確な柱痕はSK23だけで確認された。他の柱材は掘り起こして抜き取ったとみられる。

SK83、SK84などの調査区南側にある遺構は、埋土が黒褐色をしていたり、大型のブロック土を含むなど、明らかに新しいと思われ、学校施設の跡と推測される。

遺物については、小片が多く時期の特定は困難であったが、室町時代の15～16世紀と近代以降に二分できる。

陶器は瀬戸美濃系で、灰釉の皿が多数を占め、甕や壺類は珠洲系、瓷器系である。

磁器は青磁と染付が出土した。いずれも中国産の輸入磁器で、陶器と比較すると若干年代が古く15世紀代と思われる。器種は碗のみで、壺などはみられない。

瓦器では香炉が出土した。

石製品では、砥石と石鉢が出土した。いずれも以前の調査でも出土している。砥石はいずれも割れており、石鉢も被熱し破損していた。

金属製品は、古銭が出土している。銭名を判読できるものは宋銭のみであった。

以上のことから、今回の藤島城跡第7次発掘調査では、これまでの調査同様に15～16世紀の藤島城が最も栄えた時期の遺構遺物を確認できたが、詳細な時期や役割などは判明しなかった。

遺跡が学校敷地に位置しているという性格上、どうしても断片的な調査の繰り返しとはなるが、これらの成果を組み合わせることで、今後藤島城の歴史的役割が明らかになることを期待したい。

引用・参考文献

鶴岡市史編さん委員会編　1977 『筆濃余理 上巻』鶴岡市史資料篇 荘内史料2
鶴岡市史編さん委員会編　1978 『筆濃余理 下巻』鶴岡市史資料篇 荘内史料3
山形県　1925 『山形縣史蹟名勝天然記念物調査報告　第一輯』
山形県教育委員会　1979 『庄内藤島城跡 - 河川改修にともなう外郭西側の緊急発掘調査 -』山形県埋蔵文化財調査報告書第25集
山形県教育委員会　1990 『藤島城跡第2次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第159集
山形県教育委員会　1990 『藤島城跡第3次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第160集
山形県教育委員会　1992 『藤島城跡第4次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第181集
山形県教育委員会　1993 『藤島城跡第5次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第193集
山形県埋蔵文化財センター　1994 『藤島城跡第6次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター報告書第10集

写真図版

調査区全景（遺構検出段階：上が西）

調査区全景（遺構完掘状況：上が西）

調査区遠景（北から）

調査区遠景（北西から）

調査区全景（調査前：南から）

調査区北壁基本土層（南から）

調査区東壁基本土層（西から）

SE71 土層断面（北西から）

SE71 完掘状況（西から）

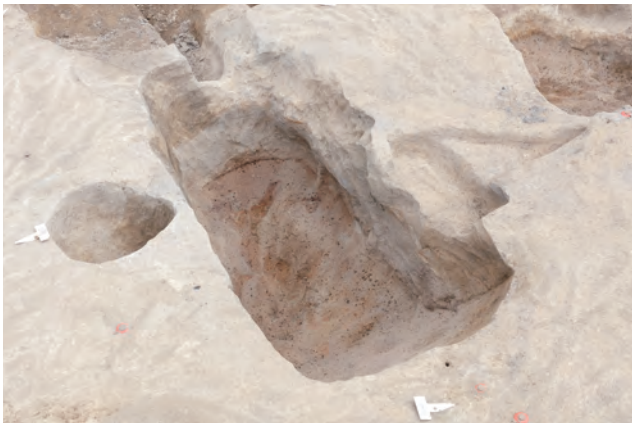
SP38 土層断面（北から）

SK29 土層断面（南から）

SP30（奥）・31（前）土層断面（南から）

SK46 土層断面（東から）

SK46（左）・SK63 土層断面（南から）



SK46 完掘状況（北西から）

SX66 土層断面（南東から）

SX66 完掘状況（南から）

SK51 土層断面（南西から）

SK51 完掘状況（南西から）

SK84（左）・SK83（右）土層断面（北西から）

SK84 完掘状況（東から）

SK54 土層断面（西から）

SK50 土層断面（西から）

SK50 完掘状況（東から）

SK23 土層断面（北西から）

SE71、SD20、SK23・50・54・84、SP5 出土遺物

28

33

39

41

38

44

45

47

48

SP7・57、SX19・66 出土遺物

49

50

51

53

54

55

56

58

59

SX66、遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ふじしまじょうあとだい７じはっくつちょうさほうこくしょ
書名	藤島城跡第７次発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第 232 集
編著者名	齋藤健　吉田満
編集機関	公益財団法人山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒 999-3246　山形県上山市中山字壁屋敷 5608 番地　ＴＥＬ　023-672-5301
発行年月日	2019 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
ふじしまじょうあと 藤島城跡	やまがたけん 山形県 つるおかし 鶴岡市 ふじしま 藤島 あざふるだてあと 字古楯跡 221	6203	423-034	38°　46′　11″	139°　54′　1″	20180528 ～ 20180706	237.6	山形県立庄内農業高等学校ライスセンター改築事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ふじしまじょうあと 藤島城跡	城館跡	中世	井戸跡 土坑 柱穴	陶磁器 石製品 古銭	中世の井戸跡や土坑、柱穴を確認した。15 ～ 16 世紀代の遺物が出土している。 （文化財認定箱数：4）

要約	藤島城の外郭内部のうち 237.6 ㎡を対象に調査した。 遺構は、井戸跡と思われる２基の大型遺構を検出した。柱穴も検出したが、掘立柱建物跡を確認することはできなかった。出土遺物より 15 ～ 16 世紀代の遺構と考えられる。 遺物も、藤島城存続期間である 15 ～ 16 世紀代の陶磁器類が出土した。中国産の青磁碗の破片の他、国産では珠洲系や瓷器系陶器の甕の破片や瀬戸美濃の皿の破片が出土した。砥石や石鉢の破片の他にも宋銭も出土した。

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 232 集

藤島城跡第 7 次発掘調査報告書

2019 年 3 月 31 日発行

発行　公益財団法人　山形県埋蔵文化財センター
〒 999 - 3246　山形県上山市中山字壁屋敷 5608 番地
電話　023-672-5301
印刷　田宮印刷株式会社
〒 990 - 2251　山形県山形市立谷川 3 丁目 1410 番 1 号
電話　023-686-6111

このPDFデータは下記の報告書を底本として作成しました。
閲覧を目的としていますので、詳細な写真や図面が必要な場合は、底本を参照して下さい。
底本は、公益財団法人山形県埋蔵文化財センター、山形県内の市町村教育委員会、図書館、各都道府県の埋蔵文化財センター、考古学を教える大学、国立国会図書館等に所蔵されています。
所蔵状況や利用方法は、直接各施設にお問い合わせ下さい。

書名：藤島城跡第7次発掘調査報告書
発行：公益財団法人山形県埋蔵文化財センター
〒999-3246
山形県上山市中山字壁屋敷5608番地
電話:023-672-5301
URL:http://www.yamagatamaibun.or.jp/
mail:yac@yamagatamaibun.or.jp
電子版作成日：2019年4月12日